

令和8年度 病害虫発生予察 注意報 第5号

令和8年7月22日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

- 1 対象病害虫 トマトキバガ
- 2 対象作物 トマト、ミニトマト
- 3 対象地域 県内全域
- 4 発生面積 前年並
- 5 発生量 前年より多い（フェロモントラップ調査結果に基づく）
- 6 発表の根拠
 - （1）トマト及びミニトマト圃場において、本虫による葉への加害が確認されている（6月末時点）。
 - （2）7月1日～7月15日に県内15地点で実施したフェロモントラップによる1地点当たり雄成虫誘殺数は99.3頭で、前年の72.2頭（15地点の平均）よりかなり多く、調査を始めた2022年以降で最も多く推移している。（図1.2）
 - （3）本年の梅雨明けは7月8日と平年（7月19日）より11日早く、例年、梅雨明け以降発生が多くなっている。また他作物の農作業も重なるため、防除遅れに伴う多発が懸念される。
 - （4）本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、福岡管区气象台が7月16日に発表した1か月予報では、平均気温は、高い確率70%、降水量は少ない確率30%、平年並40%と予想されており、引き続き好適条件が続く可能性が高い。

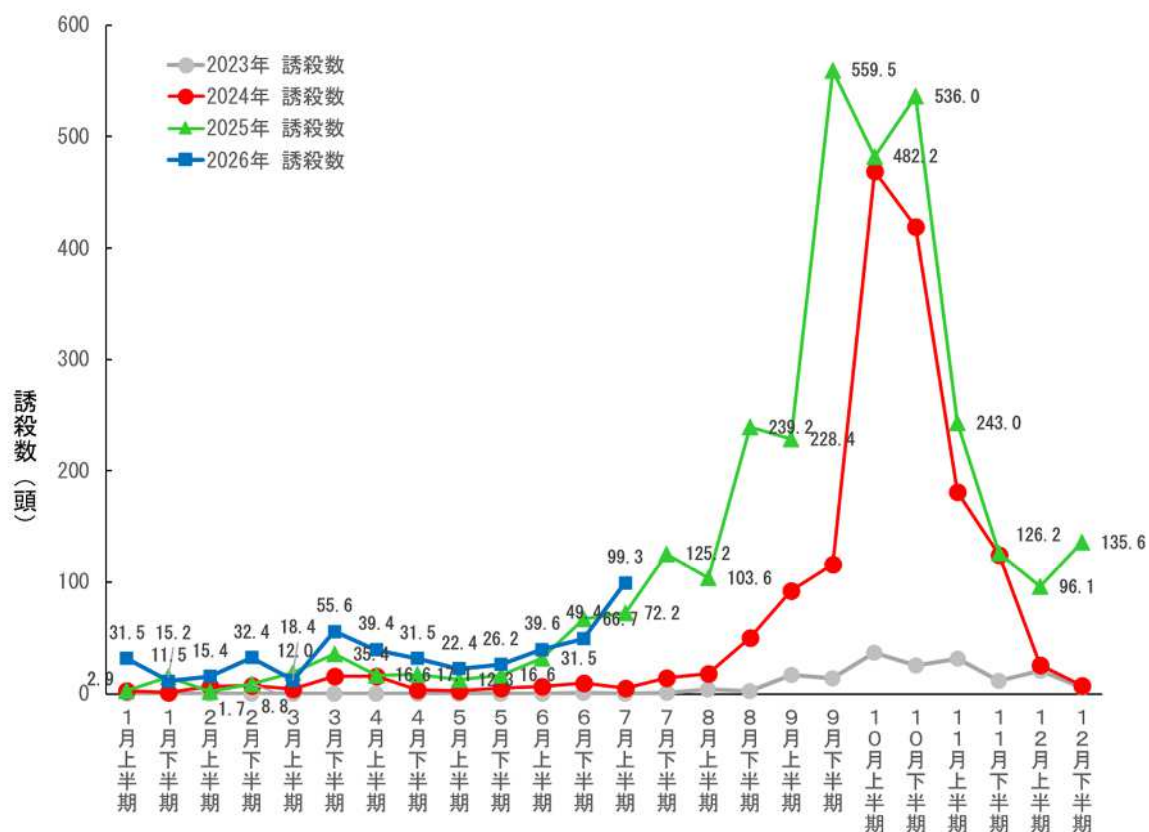


図1 トマトキバガの1地点あたりの年間誘殺数(2023～2026年)

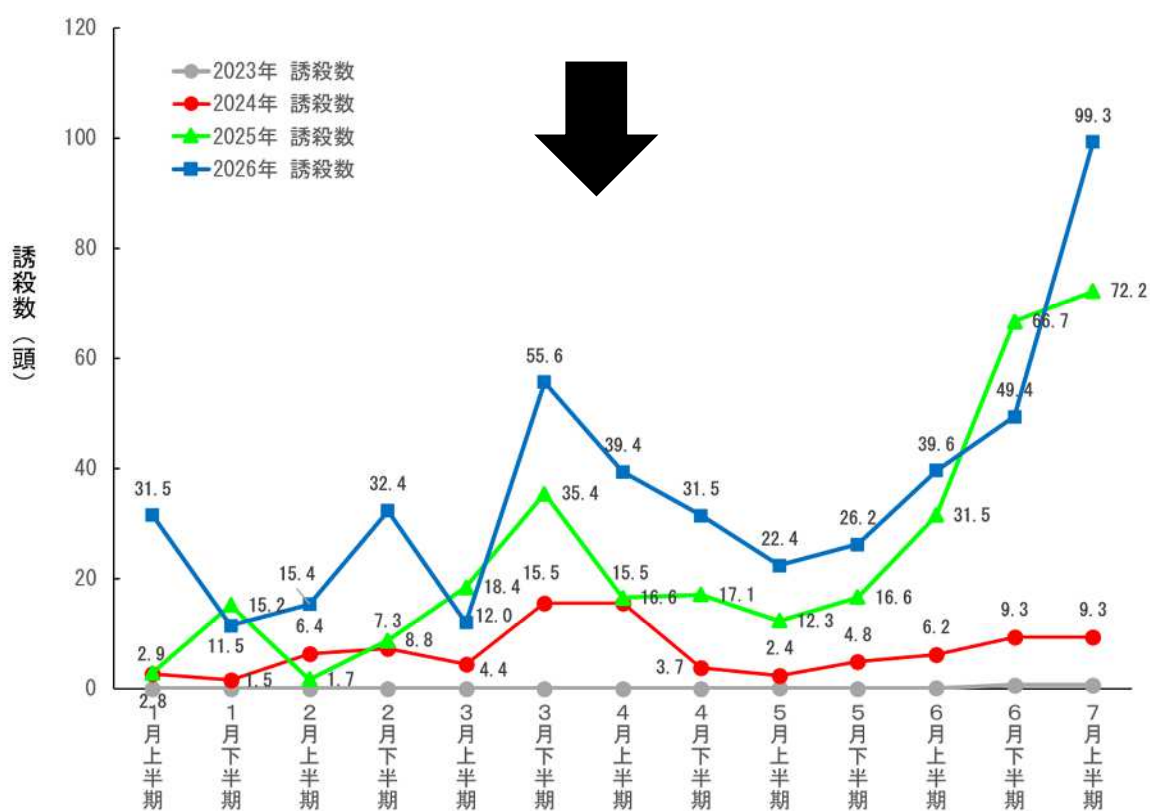


図2 トマトキバガの1地点あたりの1月～7月上旬にかけての誘殺数(2023～2026年)

7 防除対策

- (1) 薬剤防除にあたっては、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一 IRAC コードの薬剤の連続使用は避ける。使用薬剤は大分県農林水産研究指導センター農業研究部病害虫対策チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」の「トマト」及び「ミニトマト」の項目を参照し、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守する。特に同一成分を含む薬剤を連用しないようローテーション散布を心掛ける。
- (2) 本虫の発生は今後急増する可能性が高いため、引き続き防除を行う。また、一斉防除の効果が高いので、産地の防除暦等を活用して地域ぐるみで実施する。
- (3) 圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。
- (4) 被害葉や被害果は圃場内から持ち出すとともに、野外に放置せずに速やかに適切に処分する。
- (5) 国内で発生が確認された作物はトマト及びミニトマトのみであるが、海外では、ナス、タバコ、バレイショ、ホオズキ等のナス科作物やマメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。トマト及びミニトマト以外の農作物に本虫が発生した場合には登録農薬がないので、管轄の県振興局生産流通部に相談する。

8 その他

トマトキバガ幼虫による被害葉は、ハモグリバエ幼虫による被害葉に似ているので、別添の「トマト葉におけるトマトキバガ幼虫とハモグリバエ幼虫の食害痕の違い」を参考にする。

病害虫対策チームホームページアドレス

<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujoshou/>



トマト葉におけるトマトキバガ幼虫とハモグリバエ幼虫の食害痕の違い

【大分県農林水産研究指導センター農業研究部 原図】

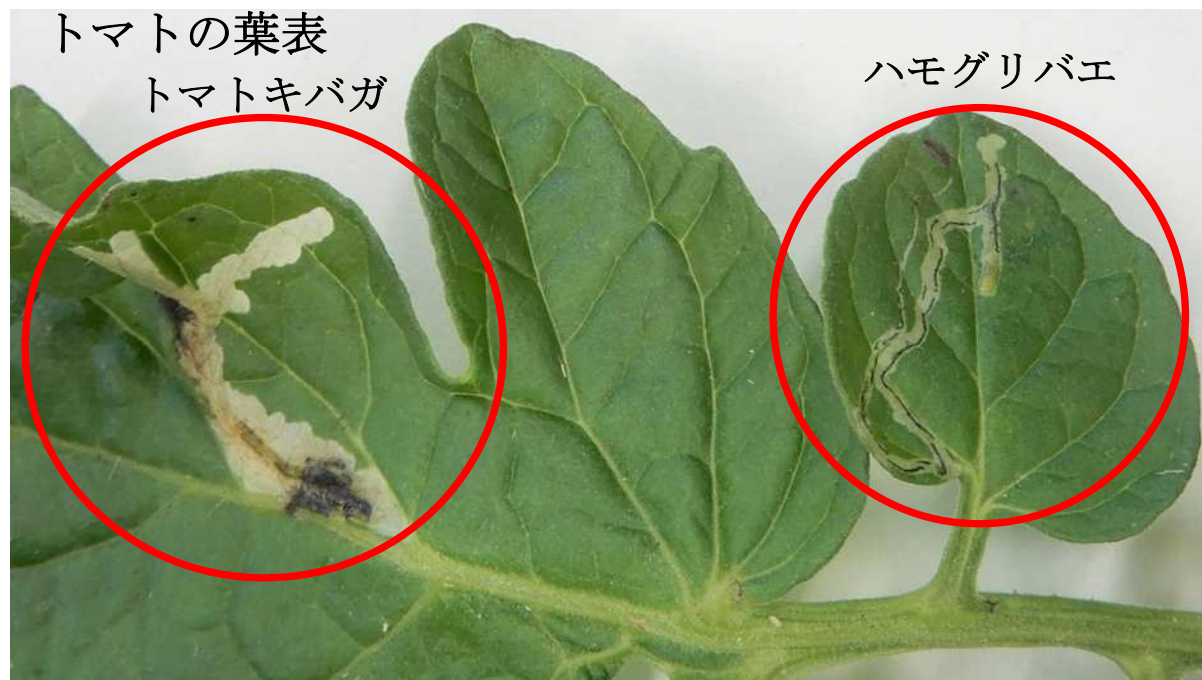


図1 左側：トマトキバガの食害（孔道の中で食害し、巣に戻って糞（下の方の黒い部分）をする）
右側：ハモグリバエの食害（食入直後は食害痕が細く、前進しながら食害し糞が線状となる）

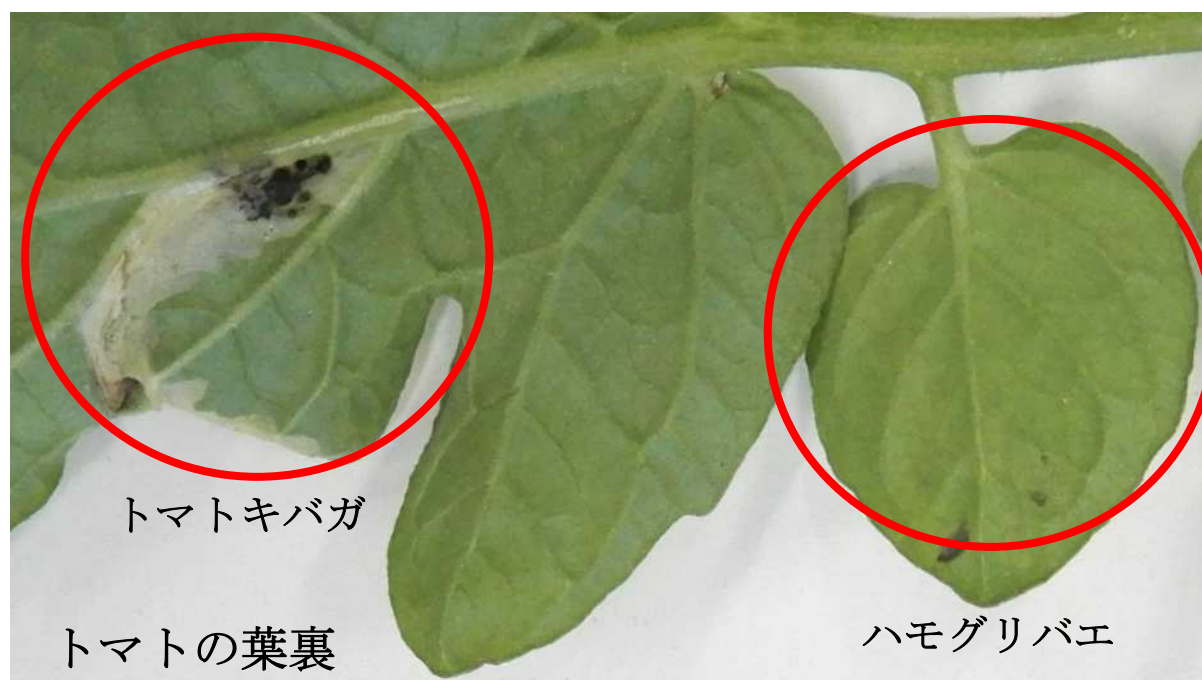


図2 左側：トマトキバガの食害（葉裏も食害痕が透けて確認できる）
右側：ハモグリバエの食害（葉裏は食害痕が確認できない）